



「與天並極」

天のとしえなるが如く、この防波堤は永久なり



横浜国立大学 研修会

3月6日(水)、横浜国立大学の留学生14名が引率の方達とともに小樽港湾事務所を訪れました。14名はインフラストラクチャー管理学専攻の大学院生で、東南アジアやアフリカなど12カ国から日本に留学しています。

まず、事務所会議室にて座学を受講。「港とはどういうものなのか」という講話から始まり、「小樽港北防波堤の歴史と現在」について、事務所職員の講義を受講しました。小樽港北防波堤は日本人による初めての外洋防波堤で、建設から100年以上経った今も、北海道一本州間の物流・人流を担う小樽港で機能しています。

小樽港着工の頃(約110)年前、日本には外海と港を仕切る防波堤が無いどころか、港に関するマニュアルも何もない時代に、小樽築港事務所(現小樽港湾事務所)初代所長の廣井 勇博士が様々な研究と実証に基づき小樽港北防波堤を建設し、それが現在も有効に機能しているという事実、留学生達は関心を示し、多くの質問をしていました。



引率と通訳を担当する横浜国立大学国際社会科学研究所の池田教授(上)と荒木教授(下)



次々と質問する留学生の方達みなさんとても熱心です



講義後、事務所1階の「みなとの資料コーナー」で、現存する資料や写真、各種模型等について、小樽港湾事務所長(現所長は第45代目です)の説明を受けながら見学しました。留学生達は歴史的な価値のある展示品を写真に撮りながら、熱心に説明を聞いていました。



第45代小樽港湾事務所長

神田 尚樹



ケースン製作用斜路の模型を動かし、体験する

消波ブロックの各種模型を非常に珍しそうに観察



防波堤基礎作りの水中作業で使用した潜水服とヘルメット

その後バスで市内を移動し、北防波堤を現地見学しました。平成12年に土木学会選奨「土木遺産」、平成13年に「北海道遺産」に指定されている小樽港北防波堤の実際の姿を写真に納めようと、留学生達は氷点下の気温の中で、カメラのシャッターをしきりに押していました。

「技術者が千年に亘って問われ続ける誉れと辱めとは、設計の立て方にある。」という技術者精神のもとに廣井 勇博士が成し遂げた偉業に触れることで、留学生のみなさんの今後の学習や帰国後の仕事に役立てていただければと思います。



現存する北防波堤斜塊の前で記念撮影

「與天無極」

天と與(とも)に極まり無しと読み、自然が万物を生かして育てる無限の力によって、永遠に生き生き発展することのように、人間もこの天意を覚り、英知を結集することにより永遠に発展を続けるという意味。石碑は明治四十一年の小樽築港第一期工事の完成を記念して北防波堤上に設置。現在は事務所資料コーナーにある。揮毫は第四代北海道廳長官北垣国道氏による。